

学びのポイントラリー

運営のしくみと活動展開（2016年版）

- 「学びのポイントラリー」とは
活動の趣旨／しくみ／プログラム登録
ポイントカード／認定証申請
ポイントラリーの背景
- プログラム実施のようす
地域のようすから
活動紹介
- 活動の記録
参加体験記／保護者からのメッセージ
実施プログラム数の推移
認定証の発行状況
新しい試み

地域の学び推進機構 会則・細則等



学びのポイントラリー

後 援

文京区教育委員会
奈良市教育委員会
貝塚市教育委員会
（公財）パナソニック教育財団
（公財）中央教育研究所
（公財）文京アカデミー
（公財）福武教育文化振興財団
（株）凸版印刷

編集・発行 地域の学び推進機構

2016年3月31日

「学びのポイントラリー」とは

活動の趣旨と起こり

子どもたちが「社会の中で自立して豊かに生きていく力」をつけるためには、学校教育、家庭教育、民間教育（塾、習い事など）だけでは、十分とは言えません。地域の中で、社会のさまざまな人たちと関わりながら学ぶ機会が必要です。また、学校週五日制が実施されて、土曜日や長期休暇には、地域にも充実した学びの場が求められています。

そこで地域の学び推進機構（以下、機構）は、地域教育を活性化するために、「学びのポイントラリー」制度を提案し、各地域でその実現を目指しています。自治体、市民団体、NPO、民間企業、大学などが、地域で実施している子どものための教育プログラムはいろいろあります。それらを登録して学校などを通じて子どもたちに紹介し、ポイントラリーのように、多様なプログラムへの参加を促すのがこの制度です。

2005年度に東京都ではじまり、登録団体数・プログラム数ともに増えています。さらには、奈良県、岡山県、京都府、大阪府など他地域にも広がりをみせています。

活動のしくみ

- ①プログラム実施団体は、自治体、市民団体、NPO、民間企業、大学、地域の施設などです。
- ②機構がプログラムをリストに登録します。これらは機構のホームページで見ることができます。
- ③子どもたちは、放課後、休日、長期休暇などに、プログラムを選んで参加します。参加するとポイントカードにスタンプが押されます。
- ④40ポイントごとに機構に申請すると認定証が発行されます。

プログラムの分野とポイント数

＜分野＞

- A) 教科学習に関するもの（学校の授業の内容の補充や深化・発展）
- B) 文化・スポーツに関するもの（学校では体験しにくい文化・芸術・スポーツなど）
- C) 市民生活に関するもの（社会問題についての講座やボランティア活動への参加など）
- D) 職業理解に関するもの（職場見学、職業体験、職業選択についての講座など）

分野によって、スタンプの色が違います。

＜ポイント数＞

1時間以上2時間未満・・・1ポイント
2時間以上4時間未満・・・2ポイント
4時間以上・・・・・・3ポイント
ポイントは年度を越えても有効です。

「学びのポイントラリー」への登録 ープログラム実施団体にやっていただくことー

対象となるプログラム

「学びのポイントラリー」は、授業外に地域で行われるさまざまなプログラムに自発的に参加して、社会人と関わりながら学ぶことを促すためのしくみです。

学区を超えて、地域の子どもたちに対して開かれた教育プログラムを推奨します。ちなみに、学校単位で行われる補習や部活、特定の子どもだけが参加する民間の塾、習い事、クラブなどは、ポイントラリーの対象にしません。

どこの地域にいても参加できるものは、「地域共通プログラム」と呼ばれます。また、他の地域の子どもが参加することを認めているプログラムも数多くあります。

市区町村等で地域のプログラム実施団体のまとめ役となってくれる代表者（機構会員）がいる場合、地域支部をつくることができます。事務局にぜひご連絡ください。

◆なお、安全面で問題のあるものや、営利目的のものなどは、登録をお断りしています。

2016年現在の実施地域

東京都 文京区 江東区
台東区 渋谷区
小金井市
奈良県 奈良市
京都府 相楽東部連合
(笠置町・和束町・南山城村)
岡山県 井原市 美咲町
矢掛町
大阪府 貝塚市

団体登録とプログラム登録

① 団体登録をします(無料)

機構のホームページから書類をダウンロードして記入し、機構本部に送ってください。ポイントラリーに参加している団体として登録されます。機構はポイントカード、スタンプ等必要なものをお送りします。

<http://www.chiiki-manabi.org/download.html>

② プログラム登録をします(無料)

新しいプログラムを実施する際には、機構のホームページから書類をダウンロードして記入し、機構本部に送ってください。また、日時や場所等の詳細が決まり次第、最新情報を機構本部にご連絡ください。機構は、インターネット等を通じて、子どもたちや保護者に広報します。

③ 参加者にスタンプを押してください

プログラムの当日、参加者のポイントカードにスタンプを押してください。プログラムの分野によって、スタンプの色が異なります。機構は、40ポイント取得した児童・生徒に認定証を発行します。（ただし、2016年度より、同じ種類のポイントは35ポイントまでというルールになりましたのでご注意ください。）

子どもがポイントラリーに参加するには —ポイントカードと認定証申請—



ポイントラリーに参加（児童生徒）

①参加したいプログラムを選びます

機構のホームページに載っているプログラム一覧から、参加したいプログラムを選びます。日時や場所をあらかじめ確認しておきましょう。



②プログラムに参加します

当日、プログラムに参加します。ポイントカードを持っていき、スタンプを押してもらいましょう。



③参加記録をつけます

ポイントシートに参加記録をつけます。用紙は機構のホームページからダウンロードできます。この用紙は認定証の裏面に学習の記録として印刷されるので、きれいに書きましょう。



<http://www.chiiki-manabi.org/download.html>

④認定証を申請します

40ポイントたまったら、ポイントカードとポイントシートを機構に送ってください。認定証が発行されます。ポイントは年度を越えても有効です。認定証の申請用紙は、こちらからダウンロードできます。



<http://www.chiiki-manabi.org/download.html>

<ポイントカード>

(表)

学びのポイントラリー
POINT CARD

Point Rally

氏名	
学校名	学校
学年・クラス	年 組 番

(中)

学びのポイントラリー

参加年月日 スタンプ プログラムの名前	4	7	11	14	18	21	25	28	32	35	39
1	8	12	15	19	22	26	29	33	36	40	
2	9	16	20	23	27	30	34	37	達成!	達成!	
3	10	17	24	31	38						

ポイント集計 | 40ポイント | ポイント | 40ポイント | ポイント | 40ポイント | ポイント | 40ポイント | ポイント | 40ポイント |

<認定証>

Point Rally

学びのポイントラリー 認定証
地域の学び推進機構

本郷 太郎

認定証番号 E09-0002

あなたが、ポイントシートに記録されたプログラムに参加したことを認定し、その意欲をたたえます。

2009年5月26日
地域の学び推進機構

印

・「学びのポイントラリー」は、地域の教育プログラムへの参加を促進するために、「地域の学び推進機構」が運営・実施している制度です。児童・生徒が、登録されているプログラムに参加すると、ポイントカードにスタンプが押されます。また、ポイントシートに本人が参加の記録をつけます。

・40ポイントたまると、児童・生徒はポイントカードとポイントシートを、「地域の学び推進機構」に送ります。機構は、各都道府県ごとに、学習記録となる「認定証」として発送します。

・「学びのポイントラリー」に参加する児童・生徒は、小学1年生から高校3年生までです。

・詳細は、「地域の学び推進機構」のウェブサイト <http://www.chiiki-manabi.org> をご覧ください。

【ポイントカードと同じ内容を入力してください】		【住所・電話番号・保護者サインと印】	
氏名（ふりがな）	本郷太郎（ほんごう たろう）	〒	119-0022
学校のある地域	東京都文京区	住所	東京都文京区本郷
学校名	文京区立第一小学校		7-3-1
学年・クラス・番号	5年2組16番	電話番号	03-5841-3947
カード枚数	3枚目	保護者サイン	本郷 一郎 印
ID No.	713105-01633063		

裏面に参加記録（ポイントシート）があります。

「学びのポイントラリー」とその背景

市川伸一（機構会長／東京大学大学院教育学研究科教授）

2007年1月12日、「地域の学び推進機構」主催のシンポジウムが行われました。

「第2回 地域の学びシンポジウム」、テーマは「地域教育の未来」。

「地域で育てる人間力 ―学びのポイントラリーの展開―」と題する講演を再録します。

本日はお忙しいところおいいただき、どうもありがとうございました。今日は「地域教育の未来」というテーマでシンポジウムを開催させていただきます。特に、私たちは「学びのポイントラリー」という活動を3年間やってきましたので、その報告を中心にお話をさせていただきたいと思っています。そして、その中でこれからの地域教育を活性化するにはどうしたらいいかということをしよに考えていく機会にさせていただければと思います。

■戦後の教育問題と教育改革の変遷

最近、教育問題でいろいろなことが言われています。皆様方もご存じだと思いますけれども、振り返ってみますと、戦後1960年代、70年代、80年代、ずっといろいろな教育問題が起きてきました。これは一つ一つ説明していると、あっという間に時間が過ぎてしまうんですけども、受験戦争がかなり激しい時代がありました。そして、どんどん受験が低年齢化している。その中で、学力中心の教育の雰囲気になかなかなじめない子どもも出てきます。受験のストレスから来る問題が起って来たり。すべてが受験のせいではないと思いますけれども、校内暴力とかいじめと

か不登校といったものが、受験も一つのストレスとなってかなり子どもたちを苦しめていたということはあるかと思います。

それに対して、当時文部省がすすめる教育改革の中で、「もっと日本の子どもたちにゆとりを」と言われました。また、これからの時代、学校を出てからも学び続ける存在として、自己教育力が必要ではないか。生涯学習ということが言われて、学校での新しい知識を身に付けていく、そういう力を持った子どもに育てたい。知識の量だけが学力ではなく、「新しい学力観」ということも1989年の学習指導要領の改訂のころから言われました。こうした動きが、1990年代に入って「ゆとり教育」と言われたわけですね。また「生きる力」ということもキャッチフレーズになりました。

教育問題と教育改革の変遷	
教育問題	教育改革
1960	
受験戦争	
1970	
受験の低年齢化	
校内暴力	ゆとりの時間
いじめ	自己教育力
1980	生涯学習
不登校	新しい学力観
学級崩壊	ゆとり教育
「学力低下」問題	生きる力
2000	総合的な学習の時間
	学力向上
2005	人間力

1998年の指導要領改訂では、「総合的な学習の時間」が新たに設けられることになりました。

しかし、2000年前後から学力低下問題が指摘されて、日本の子どもたちが勉強で追いつまれているのははるかに昔の話であるとも言われました。もちろんそういう子どももいるわけですが、多くの子どもたちは恐ろしく勉強をしなくなっている。そういう時代にゆとり教育というようなことをやっているとなすます学力が下がるのではないかといいわけでは。文部科学省もひところよりは「ゆとり」という言葉を使うのを抑えて「学力向上」をスローガンにするようになりました。しかし、それは単に昔への回帰ということではなくて、一方では「人間力」を育てるということも言われています。今は学力をつけると同時に社会で生きていくための人間力をつける、そういう両方のことが求められている。教育としては当然だと思いますが、そのどちらも子どもたちに身につけてほしいということが言われている時代だと思います。

■学力から人間力へ

この「人間力」という言葉ですが、私も座長としてかわりました内閣府の「人間力戦略研究会」があります。大きな審議会ではありません。むしろこじんまりとした研究会ですが、半年の間に大きな問題を集中審議をしました。教育分野、産業分野、労働・雇用の分野、特に労働・雇用の分野はニートとかフリーターが急に増えてくるという問題を受けて、子どもたちにもっと社会に出て働く意義をわかってほしいということで参加されました。ゲストスピーカーの方もこの三つの分野からいろいろな方をお招きしました。

すでに「人間力」という言葉を使うことは決まっていました。私が付けたわけではなくて、すでに内閣府で決められていました。しかし、それにどういう意味合いを持たせるかということも含めて、この研究会で議論してほしいということでした。そこで、人間力とはどういうことだろうか。これを考えるときに、従来の教育の世界ではややもするとノーベル賞を取った科学者とか、スポーツの世界でプロになったり、あるいはオリンピックで金メダルを取るようなアスリートとして活躍する方たち。こういう人たちが教育界ではしばしば理想のように見なされるところがあります。

確かにそういう方たちは自己実現を果たした立派な方たちではあるのですが、むしろそういう教科教育を極めたような人たちをモデルにするのではなくて、健全な生活を営んでいる一般市民こそをモデルと考えて、教育ということをあらためて組み立てていったらどうだろうかということ考えたわけでは。教育において何を育てるのかというときに、学問をすることが学習で、それをする力が学力で、それを育てるのが学校だという考え方から、むしろ人間として社会の中で自立して力強く生きていく力、これをもって人間力と考

「生きる力」の発展としての「人間力」

内閣府「人間力戦略研究会」(2002年11月～2003年3月)

教育、産業、労働・雇用の分野から「人間力」を考える
「人間力」という言葉に触発されて教育像が広がること

健全な生活を営んでいる「一般市民」をモデルに

教育によって何を育てるのか

「学問＝学習＝学力＝学校」から

「人間として、社会の中で、自立して力強く生きていく力」へ
知的能力的要素、対人関係的要素、自己制御的要素

2010/2/14

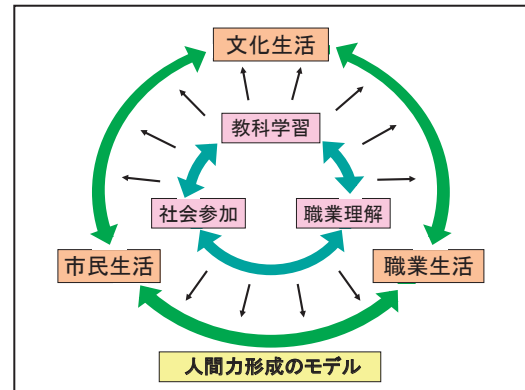
えて、こういうものを育てていく教育を考える必要があるのではないかと思います。

この人間力戦略研究会の報告書はホームページにも出ています。経済財政諮問会議のホームページの中に入っています。その中で、「では人間力というのはどういう力か」ということで、学力も含めた知的能力、対人関係力、自己制御力——これは自分で自分を律する意志の力というようなことですが、これらを要素として挙げました。しかし、これだけだと何のことかよくわかりませんので、私はむしろそういう人間力をどういう場で発揮するのが大事だと思っています。大人は実際にこういう人間力を身につけて社会の中でどんな生活をしているのか、という生活の場にこそ着目してほしいのです。

■人間力形成のモデル

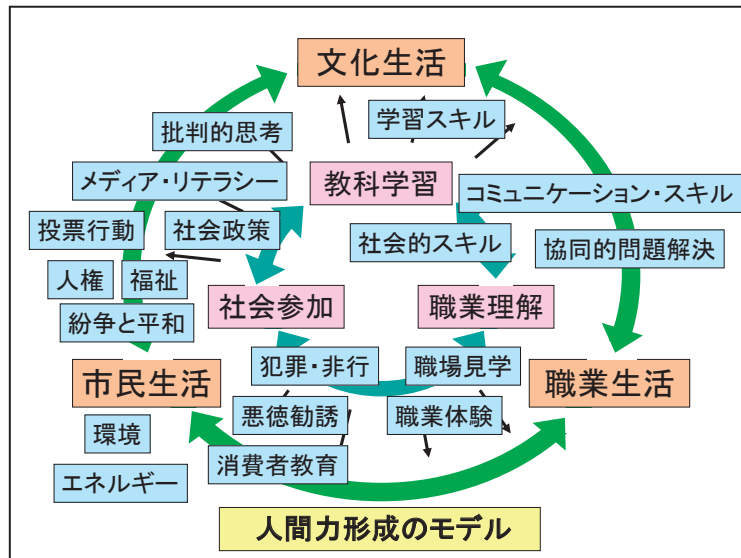
では、社会の中で大人はいったい何をやっているのだろうかと考えてみますと、まず、大人は社会の中で仕事を持っている。職業生活という側面があります。次に大人は市民生活をしている。例えば、ボランティアとして地域で働いたり、自治会で仕事をしたり。あるいは選挙になると、いったいどういう意見を持った人が候補者になっているのかを見て、自分の思いを果たしてくれそうな人に投票する。これが市民生活という側面です。さらに大人は社会の中で文化生活を営んでいる。例えば地域の中の俳句クラブとか、あるいはプロではないけれどもオーケストラのサークルで活躍しているとか、いろいろな芸術やスポーツのサークル、そういうところに入って文化的な生活を楽しんでいる。

もちろんこのほかにもあると思いますけれども、大人が社会の中で営んでいる最大公約



数的なものとして職業生活、市民生活、文化生活を考えました。この外側の円が大人の姿ということになります。そこで人間力を発揮している。それに対して子どものころから何をやるべきだろうかと考えると、図の内側の円が子どもということになります。職業生活の基礎としては職業理解の教育。世の中にはどんな仕事があるのか。それぞれはどんなやりがいがあるのか。それになるためにはどうすればいいのかといったことを広く学ぶのが職業理解の教育です。市民生活の基礎としては、子どものころからいろいろな社会参加をする、大人と一緒に活動してみる、あるいは大人と社会問題について勉強する、というような機会が必要ということです。文化生活の基礎としては学校でやっているような教科の学習があります。これは体育とか音楽とか美術というものまで含めて、大人になっていろいろな文化生活を営むための基礎を学ぶ。

こういうことを学習しながら、だんだん大人としての人間力を身につけていくのがこの「人間力形成のモデル」になります。そう考えてみますと、これまであまり教育の中で表に出してこなかったようなことがいろいろ浮かんできます。例えば学習スキル、これは勉強の仕方についての技能になります。どうやって勉強をしたらいいのかよくわからないという子どもたちはたくさんいます。しかし、



勉強のしかたを教えてくれるところはなかなかない。学校も個々の教育内容については教えてくれますが、家に帰ってどんなふうに勉強をしたらいいのかということはよほど丁寧な先生でないとなかなか教えてくれません。あるいは丁寧な学習塾でないと教えてくれない。

生涯学習ということを考えると、学習するスキルそのものももっと表に出してどこかで教えなくてはいけないのではないかな。あるいは仕事に少し近くなりますがコミュニケーション・スキルとか社会的スキル、あるいは協同的な問題解決能力。これも企業でしたらチームを作って仕事をする人が多いと思いますが、みんなで一緒に相談しながら問題を解決していくという力です。職業理解としては、職場見学とか職業体験をしてみることがあります。文化生活の中でも少し市民生活に近いものとして、批判的思考とかメディア・リテラシーと言われているものがあります。新聞に書いてあることをうのみにしてしまうのではなくて、「本当だろうか。別の新聞では別のことを言っているな」というようなことを見比べてみたり、どうやってメ

ディアをうまく使いこなしていくか、またメディアに自分が発信していくかという力です。

社会参加ですが、市民生活に結び付けるには、今世の中ではどんな社会政策が採られているのかということを理解してそれを投票行動に生かすとか、福祉とか人権、紛争と平和、また、環境、エネルギーといったグローバルな問題について学んでおく必要があります。また、市民生活を営んでいくためには、社会の負の側面も知っておかなくてはいけない。例えば世の中にどんな犯罪や非行があるのか、あるいは子どもたちやお年寄りもよくターゲットになってしまう「悪徳勧誘」は、どんな手口でやってくるのかということも知らないといけな。また、賢い消費者として生活していくための消費者教育といったものも必要になってきます。

■地域教育の重要性

社会で生きていくことを考えると、実にいろいろなことを学ばなくてはいけない。ところが、これを全部学校でというのはおよそ無理だろうと思います。学校も「総合的な学習の時間」ができて、ずいぶんいろいろなこと

を学ぶようになってきましたが、学校だけではないのはとても無理です。世の中には学校だけではなくて、いろいろな学習環境があります。ここでは特にその中でも大きなものとして、学校教育、民間教育、地域教育を挙げました。それぞれに長所・短所があります。これも時間がないので、細かくはお話しできません。白丸が長所、黒丸が短所のつもりで書いたものです。

今日特にお話したいのは地域教育です。地域教育として今、自治体や市民団体、大学、民間企業などがいろいろなことをやっています。私ももともとは学校教育に関する仕事が多かったのですが、この3、4年、地域教育に関わるようになると、実にいろいろなところでいろいろなことが行われていることがわかりました。

地域では、多様なプログラムが提供されています。生徒は自由、自発的に参加できる。費用も安いものがほとんどです。ところが、短所として黒丸で書いたのですが、やっていらっしゃる方から話を伺うと、もともと意欲の高い子どもたちは来るけれども、どうもあ

まり来てくれない。多くの子どもたちは、そもそもどういう地域教育があるのかということすらよく知らない。例えば熱心な親が子どもに勧めたり、あるいは自分で調べて行ってみようとする子もいるのですが、非常に数が少ない。どうやったらもっと子どもたちにたくさん来てもらえるかということを考える必要があるだろうと思います。

そこで人間力戦略研究会の中で、私から提案して入れてもらったのが「授業外学習ポイント制度」というアイデアです。「地域で行う超・選択学習」と書きました。学校でも選択学習はあります。私たちが子どもころに比べるとずいぶんいろいろなものが選べるようになっていっているのですが、それに「超」が付くということで、地域に行くとはるかにたくさんものがあります。実際、市民団体やNPOとかいろいろなところがいろいろなプログラムやイベントをやっている。それを子どもたちは知らないことが多いので、学校を通じて児童・生徒に紹介するわけです。分野としては教科の学習の補充・発展でもいい。さらに、文化・スポーツ、市民生活、職業理解

さまざまな学習環境の長所・短所

学校教育（授業・補習・部活等）

- 義務教育は、すべての子どもが受けられる
- 高校も、公立ならば費用はあまりかからない
- 成績・卒業が、進学・就職の社会的評価につながる
- 児童・生徒に内容選択の自由が少ない
- 補習・部活は、学校に所属している生徒しか参加できない

民間教育（塾・習い事等）

- 多様な内容・レベルから選択できる
- 家庭に経済力がないと受けにくい
- 商業ベースにのり内容に限定されがち

地域教育（自治体・市民団体・大学・民間企業等）

- 多様なプログラムが提供される
- 生徒は、自由、自発的に参加でき、費用も安い
- もともと意欲が高い子どもだけになりがち

という人間力にかかわるものを広く含めました。

具体的な運営・実施形態として、例えば学校によっては、こういう制度を運営しているところがあります。学校がポイントカードなどを作って、子どもたちに出てくるように促すということを始めたわけです。富山県滑川市の寺家（じけ）小学校がこれを大規模に展開しています。学校は自分たちでプログラムをするわけではないのです。あくまでも地域のプログラムに出てくることを促す。新潟県見附市にある名木野小学校、ここでもそういうことを始めました。東京都渋谷区の子谷小学校、今日は校長先生、教頭先生が見えています。場所は学校を使いますが、地域の方やPTAの方がいろいろなことを夏休みなどにやってくれている。先生方がなさるプログラムもあるのですが、地域の方がいろいろなプログラムをやってくれて、子どもたちにそれに出ることを促しています。

■「学びのポイントラリー」とは

市民団体による運営をしているのが、今日

のシンポジウムを主催している「地域の学び推進機構」です。東京にいくつかの支部を作って、それぞれの支部ごとに授業外学習ポイント制度を実施するということを始めました。あと、自治体による運営ですが、もし、実施団体のとりまとめ、広報活動、ポイントカードの作成などを自治体のほうで担当の方を置いてやってくださっているというところがあれば、それでもいいのです。静岡では、県の教育委員会でそうしたシステムを考えていらっしゃるということです。

「学びのポイントラリー」は「地域の学び推進機構」が行っている授業外学習ポイント制度に付けた名前です。運営主体は地域の学び推進機構が運営主体になることもありますし、あるいは自治体が主体になることもあります。自治体が主体になれば、機構はそれをお手伝いするというかたちです。文京区では、運営は市民側ですが、教育委員会がこの活動を後援してくださっています。それから財団法人・松下教育研究財団（現、パナソニック教育財団）が研究助成をしてくださっています。高校生プログラムはこういう地区町村の

単位をはるかに超えていますので、地域限定はありません。

年間40ポイント以上の取得を子どもたちに促していきたいと思っています。40ポイントというと、もし仮に1回1時間実施のプログラムでしたら40時間の参加ということになります。時間により、1回で2ポイントとか、3ポイントとかになるものもあります。毎週土曜日に出るとか、あるいは夏休みにがんばって、40

授業外学習ポイント制度

地域で行う超・選択学習

自治体、市民団体、NPO、民間企業、大学、地域の施設等が
教育プログラムを提供

学校を通じて、児童・生徒に紹介

分野としては、

教科学習／文化・スポーツ／市民生活／職業理解

具体的な運営・実施形態

学校による運営：寺家小学校、名木野小学校、子谷小学校

市民団体による運営：地域の学び推進機構

自治体による運営

2010/2/14

ポイントくらいは取ってほしいということで。認定証は、学習履歴として進学先とか就職先などに、こういう活動をしてきたという自己アピールに使っていただけるといいと思っています。

この活動が動き出してからの新しい試みとしては、例えば「実施ボランティアポイント」ということも考えました。中学生や高校生になれば、運営のお手伝いをするのもぜひやってほしい。例えば小学生が来るプログラムの運営のお手伝いに当たってもらう。それも中学生や高校生にとってはポイントになるということにしました。これは、市民生活のポイントになります。

「ポイントラリー作文」というのもつくりました。プログラムに出てそれで終わりではなくて、自分の活動を振り返って参加体験記のようなことを書いてもらう。あるいは小論文として、例えば「私とポイントラリー」というように、ポイントラリーにずっと参加してきて自分がどんなことを考えたかというような小論文も歓迎します。これにもポイントが付きます。

■活動の成果と今後の課題

では、実際に始まってどういう成果が上がっているのか。確かに例えば文京区でも学校を通じて子どもたちにPRすることがかなりできるようになりましたし、ポイントカードを持って子どもたちが来るということが、非常にやりやすくなりました。文京区では、区の教育センターでやっているプログラムを全部このポイントラリーに載せてくださっていますので、教育委員会が後援して下さると非常に活動の幅が広がってきました。江東区では東川（とうせん）小学校でやっている「ウィークエンドスクール」というプログラ

ムをポイントラリーにのせて、学校としても参加を促しています。子どもたちは朝礼で校長先生から認定証を渡してもらうというかたちで、励みになっているそうです。

認定証の発行数は、残念ながらまだそんなに多くはありません。私たちはもともとこういう活動になかなか出てこなくなる小学校高学年、中学生、高校生に出てきてほしいという狙いで始めたものですが、やはり中学生や高校生は部活があったり、塾に行ったりでなかなか出てきてくれない。でももっと出てきてほしいという思いで始めました。

しかし、文京区で中学生が40ポイントですべてボランティアポイントで取った生徒さんが出ました。江東区では、特に今年に入ってからたくさん認定証を申請してくるようになりました。中には2枚目、一番多い子は3枚目です。この活動を軸にして地域のいろいろなプログラムに出るというような子どももいます。

今後皆様のお力添えを受けて、まずこの活動に参加するプログラム実施団体が増えるといいと思います。登録制ですので「うちのプログラムを載せてほしい」と言ってくだされば私たちはどんどん載せております。そしてホームページあるいは学校を通じてそういうプログラムを紹介することになります。それから、教育委員会や学校には、ぜひ子どもたちに対してこの活動を促していただければと思います。江東区の東川小学校でたくさん子どもたちが取っているのは、やはり学校が促していることが非常に大きいと思います。あとは保護者や子どもたちにこういう活動に着目していただいて、休日あるいは夏休みなどに、ぜひ社会人と一緒に活動する機会に出てきていただければと思っています。

最後に、これは、参考図書として学びのポイントラリーについて少し書いてある本です。特に『学力から人間力へ』というのは、人間力戦略研究会のメンバーたちが自分の意見をまとめて、会議で言い足りなかったことも含めてそれぞれ書いた論文集のようなものですので、会議のようすもよくわかり参考になるうかと思います。

今日は各支部からその活動の報告をしていただきます。そのあと、地域教育をテーマにしてパネルディスカッションをしていただくこととなります。パネルディスカッションの

際にはフロアの方々からもぜひいろいろなご意見、ご質問を出していただければと思います。私からはひとまずこの学びのポイントラリーの概略をお話しさせていただきました。どうもご静聴ありがとうございました。

《参考図書紹介》

市川伸一（編）『学力から人間力へ』（教育出版、2003）

市川伸一『学ぶ意欲とスキルを育てるーいま求められる学力向上策』（小学館、2004）



シンポジウム当日の様子。
会場は、東京大学経済学部1番教室。

全国から、約130名の参加があり、
活発なやりとりがなされました。